

緋弾のエリア～化け犬武偵と百獣を統べる姫～

愛宕夏音

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

妖怪が日本中を闊歩していた時代から500年以上も後。世界からは妖怪という存在は、その殆どが姿を消し、人間の世界はその存在を迷信だと断じてきた。

しかしそれでもその血は受け継がれてきた。

かつて四魂の玉をめぐる、奈落と呼ばれた半妖と戦い、そしてそれを滅ぼした同じく半妖の犬夜叉。500年後の日本で、受け継がれたその血はまたも戦いに身を投じる。祖先と同じく彼もまたその全霊を懸けて守りたい女を見つけたからだ。

惚れた女の為なら誰とだって戦える。そう誓う1人の少年の先には果たして……………。

これは『犬夜叉』の後の現代が『緋弾のアリア』だったらという物語です。

至らぬ点や矛盾などが多々あるかと思いますが、温かい目で見守っていただけると幸いです。

目次

登場	1
決意	8
過去の逃走と戦い	17
レインボーブリッジの死闘！ 金剛石の鉄砕牙	27
休息と亀裂	37
銀色の毒使い現る	46

登場

「ご主人様、朝ですよ」

「……………ん、ああ、おはよ、リサ」

俺のメイドであり、また最愛の恋人でもあるリサの優しい声に目が覚める。二段ベッドが二つある寝室には遮光カーテンの隙間から朝日が少し覗いていた。春休みは昨日で終わり。今日から学校である。ちなみにリサには2人きりか事情を知っている奴だけの時は『ご主人様』でいいが、それ以外の時は名前で呼ぶように言っている。さもないと学校なんかで『ご主人様』と呼ばれた日には男子だけではなく、学年中から質問攻め&追い回されることになるだろうし。リサは人気者なのだ。

すると……………ピン、ポーン……………と慎ましやかなチャイムが鳴った。その音で俺が寝ていたベッドの横の二段ベッドの下段で寝ていたルームメイトの遠山キンジも、のそのそと起き出してきた。

「……………キンジ、多分白雪だと思う。お前出てこい。……………俺はリサと朝飯並べてるから」

「……………ん、分かった」

眠い目を擦りつつキンジは玄関に向かい、俺とリサはキッチンの方向に向かう。

「いただきます」

俺とキンジは二人揃って食前の挨拶。それぞれの朝食に箸を伸ば

す。それを見たりサも自分の朝食を摂り始める。

さつきチャームを鳴らしたキンジの幼馴染みである星伽白雪はもう食べてきたのかキンジが彼女が持ってきた朝食——なんと漆塗りの重箱だ。それも五段も重なっている——を食べているのをニコニコしながら眺めている。春休みの間はリサがキンジの分もついでに作ってくれることが多いのだが、今日は白雪が来ることは知っていたらしく、作っていないようだった。

「これ……作るの大変だったろ」

するとキンジが重箱を見ながら白雪に言う。すると白雪は、

「う、ううん。ちよつと早起きしただけだよ。それに春休みの間はリサさんに任せつきりだったから。……それにまずは胃袋を掴めって」

後半はぼそぼそ声だったので都合よくキンジには聞こえなかったようだ。これが最近流行りの難聴系主人公というやつなんだろうか。

「……それは、まあそうだが」

その頃には俺とリサは食べ終えて食器を片付け始めていた。

キンジは白雪が無駄に大量に作ってきたのでまだ終わっていない。

キンジが食べている間に俺は顔を洗ったり歯を磨いたり制服に着替えたりと学校へ行く準備を済ませます。リサの方も準備が整ったようなのでリビングに顔を出すと白雪がキンジのブレザーとテレビの脇に放つてあった拳銃を持ってきていた。

校則により武偵高の生徒は学内での帯銃と帯刀を義務づけられている。俺もリサもブレザーやスカートの内側、腰やポケットに拳銃や刀剣類を持っている。

「キンジ、俺たちはそろそろ出るからな。始業式遅れんなよ」

「あ、ああ。俺はメールチェックしてから行くわ」

キンジに一声かけてから学校へ向かう。普段から俺とリサは少し早めに出て二人で余裕を持ってバスや徒歩で学校へ向かい、キンジはギリギリのバスか自転車で学校へ来る。キンジはわりとぐうたらなのだ。



ここ、東京武貞高では始業式などに去年死んだ生徒に黙祷を捧げる習慣がある。哀悼の意を表すとともに自分たちにも“こうはならないぞ”と心に刻むのだ。

——武偵とは、近年頻発する凶悪犯罪に対抗して作られた国際資格である。武装を許可され、逮捕権も有しており、報酬に応じて“武偵法”の許す範囲においてあらゆる仕事を請け負う、所謂、便利屋だ——

そしてそれを育成する教育機関は世界中のそこかしこに存在する。日本の東京には東京湾岸部にあるここ東京武偵高校、通称を学園島と言う。そこに俺とリサは通っている。

始業式を終え、発表された新しいクラス——俺とリサは2年A組だった。ちなみに、今年もキンジとも同じクラス——に入る。始業式の時も見なかったが、未だにキンジは登校してきていないようだった。流石にメールチェックしながら寝落ちしたということもないだろうが、ダラダラし過ぎてバスを乗り過ぎたとかはあるかもしれない。

「キンジ、来ねえな」

思わず呟いてしまったがキンジはS H R直前になってもやっこない。いくらなんでもそろそろ到着するだろうと思っていたのだが、何かあったのだろうか。

すると、ガラツと後ろの扉が空いて、何やら疲れ切った顔でキンジが教室に入ってきて机に突っ伏す。それを見た身長190近い大男の武藤剛気が白雪がどうのこうのと絡みにかかるがそれをキンジは「今の俺に女の話題をふるな」と、アツサリ拒否。
そこでようやく今年のクラスの担任の先生が入ってきた。

「はい、それではHRを始めますよー」

この人は高天原ゆとり先生。探偵科インケスタの先生でこの学校の教師にしては珍しくおっとりとしている常識人枠の人。ちなみに昔のこの人の2つ名は血塗れゆとりブラッティ！ユトリ。……怖すぎでしょ。

「じゃあまずは去年の3学期に転校してきたカーワイイ子から自己紹介お願いしますーす」

初っ端から出席番号順ですらなかったがそこで立ち上がったのは世にも珍しいピンクブロンドのツインテールの背が低い女の子だった。彼女は神崎・H・アリア、強襲科アサルトという負傷率の高い危険な学科に所属しているながら、負傷率はほぼ0に近い。強襲成功率も世界ランカーらしく、当然そこでのランクは最高ランクのS。ちなみに強襲科のSランクは1人で特殊部隊一個中隊クラスの戦闘力を有している、らしい。

そしてソイツはいきなりキンジを指差し、

「先生、あたしはアイツの隣に座りたい」

と、言い出したものだからクラス中大騒ぎだ。
キンジは絶句し、イスから転げ落ちてるし。

「よ、良かったなキンジ！よく分かんねーけどお前にも春が来たみたいだぞ！先生！俺、転入生さんと席代わりまーす！」
と、武藤はキンジの手をブンブン振りながら満面の笑みで席を立つ。

「あらあら。最近の女の子は積極的ねえ。じゃあ武藤くん、席を代わってあげて」

先生はなんだか嬉しそうにキンジとアリアを交互に見て、武藤の提案を受け入れる。

するとクラスの連中は拍手喝采。

俺も横の席のリサと目を合わせ、お互いに苦笑いをするしかない。

「キンジ、さっきのベルト」

アリアが新たな自分の席に歩きながらキンジに何故かベルトを放り投げた。

……一体お二人はどのような関係で？

キンジがベルトをキャッチすると――

「理子分かった！分かつちやっただー！これ、フラグばつきばきに立ってるよー！」

と俺の前、キンジの左斜め前の席に座っていた峰理子が勢い良く席から立ち上がる。

「キーくんベルトしてない。そのベルトはツイントールさんが持ってた！これ謎でしょ？でも理子には推理できた、できちゃった！」

アリアと同じくらい背が低い探偵科のおバカ代表こと峰理子。自分の制服をヒラヒラのフリフリに改造している。ちなみにキークンとは、こいつがキンジにつけたあだ名である。

「キークンは彼女の前でベルトを取るような何らかの行為をした。そしてベルトを彼女の部屋に忘れてきた。つまり二人は熱い熱い恋愛の真っ最中なんだよ！」

ツーサイドアップテールの天然パーマの髪をぴよんぴよん揺らしながらのお馬鹿推理。

……アホくさ

俺はクラスがまた騒ぎ出すのを尻目に机に突っ伏す。

武偵高の生徒はこの一般教科でのクラス分けとはまた別にそれぞれの専門科目でクラスの枠を超えて学ぶので年度が変わっても顔見知りというか友達率が高いのだ。そしてお馬鹿ばかりなこの高校は基本的にみんなノリが良い。……大抵それが活かされるのは悪ノりする時くらいなのだが。

しかしクラスの騒ぎがかなり大きくなると

ダンダン！

と、2発の銃声が鳴り響き、クラスを一気に凍りつかせる。俺が顔を上げると真っ赤になったアリアがガバメントの2丁拳銃を天井に撃つたらしいのが確認できた。ガバメントから排出された空薬莖が床に落ちて、鈴の音のような音を鳴らして静けさをより際立たせる。理子はよく分からんポーズのまま、ズ、ズズ、ズ。と、ゆっくり着席。

確かに武偵高では校舎内での発砲は禁止ではない。しかし必要以上にはするなとなっている。

これが必要以上かどうかは審議が必要だと思うが、それはさておきいくらなんでも始業式の日、それも自己紹介でいきなり拳銃をぶっぱなしたのはこの学校がどんなにトチ狂っているとは言え、コイツが初めてに違いない。

そんなアリアが真っ赤になったまま発した言葉は、

「れ、恋愛なんてくっだらない！全員覚えておきなさい！」

そして

「そういう馬鹿なこと言う奴には……」

「――風穴開けるわよ！」

それが、2年に進級した神崎・H・アリアがみんなに発した、最初の言葉だった。

決意

時刻は夕方。

俺はリサの煎れたコーヒーを飲みながらゆったりとソファでくつろいでいた。リサは現在夕飯の支度をしている。

しかしキンジはコーヒーにはあまり手を付けず、何やら物思いに耽っていた。理由はなんとなく察しがつく。多分、昼前に来た周知メールの件だろう。

どうやら2年の男子の乗ったチャリが何者かに爆破されたらしい。で、その被害者は十中八九キンジだろう。アリアがキンジのベルトを持っていたのもそれに関係してなのかもしれない。そうなる今朝のHRでの出来事が酷い茶番にしか思えない。周知メールでは例の武偵殺しの摸倣犯の可能性が高いと書いてあったがそれは違う。何故なら――

ピンポーン

と、俺がそこまで思考したあたりでチャイムが鳴った。リサは夕飯の支度で忙しいし、俺が出るか。

俺が玄関に辿り着くまでも絶え間なく鳴り響く小煩いチャイムの元凶の顔を拝んでやろうと玄関のドアを開ける。

「うるせーな。そんなに連打しなくても聞こえてるよ」

「遅いーあたしが押したら5秒以内に出ること！……キンジいる？」

ドアを開けるとそこにいたのは今朝のHRでガバメントぶっぱなしたアリアだった。

「キンジ？ ああ、居るけど」

「そ、ならいいわ。トランク中に入れといて」

何がいいのか知らんがそれだけ聞くとズカズカと人の家に入り込んだ。

「あーおいー……トランクってこれか。泊り込む気かよ」

アリアが玄関前に放置していった小洒落たストライプ柄のトランクを見て思わずげんなりする。しかも中に入れようとすることも思いの外重く、明らかに泊り込むんだろうなと再認識させられた。

「キンジ。アンタあたしのドレイになりなさい！」

……………はい？

リビングに入った途端聞こえてきたのはキンキンのアニメ声からの衝撃的な一言だった。窓際からキンジを指さしながら得意気な顔で言い放っていた。一方のキンジは放心状態。……当たり前である。いきなり押し掛けられて挙句奴隷になれ、だもんなあ。

「ほらリサ！飲み物ぐらい出しなさいよ！コーヒー！エスプレッソ・ルンゴ・ドツピオー！砂糖はカンナ！1分以内！」

「え、えつと……」

リサが困った顔で俺を見てくるので俺も

「リサ、コイツは客じゃない。何も出さなくていいからな」

と、言うておく。それに、ここにはそんな呪文のようなコーヒーは置いていないしな。

「何よ！無礼な奴ね！風穴開けるわよ！」

しかしアリアはよっぽど気に食わなかったらしくいきなり拳銃を抜いた。流石にリサには撃たないだろうがそれでも家の中で拳銃なんて撃たれてはたまらないので仕方なしにリサにインスタントコーヒーを出すように頼む。

その匂いを嗅いだアリアは、どうやらインスタントコーヒーというものを知らなかったらしい。味に関してはヘンな味と言いつつも特に不満はないようだ。つた。

そこでキンジが話を切り出す。

「味なんかどうでもいいだろ。それよりもだ」

「今朝助けてくれた事には感謝してるし、その……お前を怒らせることを言ってしまったのも謝る。でも、だからってなんでここまで押しかけてくる？」

ふんふむ。やはり今朝のチャリ爆破事件の被害者はキンジで、助けたのはアリアらしい。そうなるともう俺とリサには犯人は分かってしまうのだが、これを伝えるのは逆に俺たちにとって危険が伴う。特にキンジには教えられないだろうな。

「分かんないの？」

と、アリア。いや、キンジには分かりようも無いと思うけどな。

「分かるかよ」

と、キンジ。まあ、目的自体はさつき大声で言っていたが、あれじゃあ伝わらないよな。

「あー、キンジ。コイツが来たのは多分お前を武偵としてのコンビを組めってことだと思っぞ」

見かねた俺が助け舟を出す。

「へー、峻稀しゅんきは流石に察しがいいじゃないの」

「大体、お前はウチの学校に来て早々に俺のこと誘ったじゃねえかよ。しかも、今と似たような文言で」

そうなのだ。このエリアは1年の3学期に転校してきて早速、俺にも同じような誘いをかけてきていた。まあ、俺は基本的に仕事の際にその時だけ誰かと組むことはあってもそれ以外ではリサとしか組まない決めていたのでその時にきっちり断ったのだが。

「……は？」

しかしそれを聞いたキンジは衝撃的だったのか絶句してしまう。……確かに今のキンジの武偵ランクは探偵科で最低ランクのEではあるのでSランクのエリアが誘うのは普通ならあり得ないのだが。

「……なんで俺なんか、俺は探偵科でもEランクなんだぞ」

「でもあんた、入試の時は峻稀と同じで強襲科でSランクだったじゃない」

そう。そうなのだ。キンジは1年の時は俺と並んで強襲科でもSランク。入試の時の俺とコイツの戦闘は今でも強襲科での語り草になっっているらしい。……アレはお互いにチートを使った結果なのだが。

「ていうかお腹すいた。なんか食べ物ないの？」

いきなり話が吹っ飛んだ。なんだよいきなり。

「夕飯なら今リサが作ってる。……お前の分は無いが」

「なんでよー!」

「なんでよって、そりゃあいきなり来た奴の飯まで用意してるわけないだろう。どうせ泊まるつもりで来たんだろうし、それは諦めるが飯は下のコンビニかどこかで買ってこい」

「コンビニ? ああ、あの小さいスーパーのことね。ねえ、そこって松本屋の『ももまん』って売ってる?」

「コイツはコンビニも知らないのか……。横でキンジは額を抑えてるし。」



「アリアがなんと7つものももまんを平らげ、俺たちも夕食を食べ終えたあと、また話は例の“ドレイ”についてだ。」

「で、さっき峻稀が言っていたが、アレはどういうことだ?」

「強襲科であたしのパーティーに入りなさい。そこで一緒に武偵活動をするの」

「嫌だね。俺は強襲科がイヤだから武偵高で一番まともな探偵科に転科したんだぞ。それをまたあんな所に戻るなんて、無理だ。それに、来年にはここを止めようかなとも思ってるしな」

しかしキンジはまだそんなことを言っているのか。まあ、アレは確かに後味の悪いものだったし、受け入れられないのなら将来も武偵としてやってはいけないだろうけど。

「あたしは嫌いな言葉が3つあるの」

……なんだ？またいきなり話が飛んだ。

「聞けよ人の話を」

「もつともです。」

『無理』『疲れた』『面倒くさい』。この3つは人間の持つ無限の可能性を押し留める良くない言葉だわ。あたしの前では二度と言わないこと。いい？」

まあ、無理と面倒くさいは分からなくもないが、疲れたは仕方ないと思うぞ。言ったら撃たれそうだから言わないが。

「なあ、アリア。少し、いいか？」

「……何よ？」

「ここじゃアレだ。ベランダで話す」

見かねた俺はアリアをベランダまで連れて行く。正直、キンジのこととは無理矢理そっち側に引き込んでほしくないのだ。

「で、なんなのよ？」

アリアが少しイラついたように聞いてくる。俺としてはアリア側の言い分を知っているだけに怒るに怒れないのだが。

「お前さ、本当にキンジじゃなきや駄目なのか？俺はアイツが探偵科に移った訳も、武偵高を辞めようか迷っている理由も知ってるんだよ。だからあまりアイツの意見というか、想いを無視したような誘いは止めてほしいんだ」

「ならアンタがあたしと組みなさいよ。あたしには時間が無いの」

「……それについては前に——いや、そうだな。……なあ、俺はさ、キングの想いを尊重してやりたいとも思っているけど、でもアイツには武偵としていてもらいたいとも思ってるんだよ。だからさ、お前が本当にアイツじゃなきや駄目だって言うなら協力するのもやぶさかじゃないが中途半端な気持ちでキングを誘うのは止めてもらいたい。けど俺にはどうあってもお前とは組めない。その理由もちゃんと話す。それでいいか？」

これが俺にできる最大限のことだと思う。本当はコイツには話したくはないのだけど、どうせ本当の事を言わないと心から納得することはないだろうし、俺という保険があったままではあくまでキングは第二希望止まり。それでキングの心を抉られるのは見るに堪えない。リサには悪いと思う。これにはアイツが深く関わっていることだし。でも、それでも——俺の葛藤が少しは伝わったのか、アリアは肩の力を抜いてふうと一息ついた。

「分かったわ。話しなさい」

「ん。じゃあ中に戻るか」

リビングに戻るとまずはキンジを自分の個室に居るようにお願いした。これから話す話はキンジが聞くには危険すぎる。本当にそういう、知るだけで危ない情報もあるのだ。世の中、特に武偵という職業には。

「悪いな、リサ。話すことになって、本当にごめん。俺のせいだ」

そしてアリアとリサと俺の3人になってから、まずはリサに頭を下げる。自分の恋人のことを最優先に出来なかった自分に嫌気が差す。ただ話すだけなのだが、問題なのはあそこでは私闘が禁じられていない上に俺たちは逃げ出した身だ。自分たちのことを話されたかもしれないというだけでもこちらに追っ手が来る可能性が高いのだ。だからこそ俺は司法取引の時ですら話す内容には慎重になった。だから今回も言葉は慎重に選ばなくては。

「いいんです。峻稀さんはリサのことを守ってくれました。これからもずっと守ってくれるとリサは信じています。それに峻稀さんが遠山様のことを本当の友人だと思っっていることも分かっています。だから頭を上げてください」

そう言ってくれるリサの優しさに俺は、心から感謝する。本当にいい女と出逢えたと思う。

キンジがチャリを爆破された時からなんとなく予感があったのだ。もしかしたら俺たちはあいつらからは逃れられないのではないかと。でも、もう戦う覚悟はできた。わざわざこちらから深く関わりに行く

気にはなれないけれど、それでも俺は誰が来たってリサを守る。

もう奴らにリサは傷付けさせやしない。

そして次にアリアの方を向く。これからコイツには俺とリサが武偵になった経緯から話さなければならぬからだ。

コイツならもしかしたらキンジに上を向かせられるかもしれない。

それに、どうせもう逃げられないのだろう。コイツがあゝの爆破事件に関わってしまった段階でそれは分かっていたことだ。俺にはリサがいるし、いくら戦う覚悟を決めたと言っても、わざわざ敵に突っ込んでいくのは馬鹿みたいだからな。リサも危険だし。だからこそ、コイツが本気でキンジと組みたいのなら応援してやろうじゃないか。

過去の逃走と戦い

——2年前、茨城県某所——

「はあつ、はあつ、くそつ」

10数匹に及ぶ白銀の狼——コーカサスハクギンオオカミ——の群れとどこまでも追尾してくる矢から逃げていた俺とリサは遂に袋小路まで追い詰められてしまう。

狼の群れはリサが抑えていてくれるのだから、それでも一定の距離を保って囲んでいる。本来、あらゆる獣たちの頂点に立つリサがいるのにも関わらず逃げ出さないのはこいつらのボスがそれ程までに強力だという証拠でもある。

どこからともなく飛んでくる矢は俺が錆び刀とその鞘、最悪は体ごと使って身に着けている下手な鎧よりも強い火鼠の毛で織った衣で弾いている。

本当なら背後のこんな壁は飛び越えてしまいたいのだが、飛来する矢からリサを守るために中々出来ずにいた。

すると矢の雨が止み、狼たちも下がりはじめた。しかしその後ろから出てきたのは

「チツ、ボスの登場かよ」

この狼たちのボスであり、現在俺とリサが逃げ出した組織のナンバー2、無限罪のブラドと呼ばれる吸血鬼が現れた。

「ゲハハハハハ！犬夜叉の2つ名で呼ばれたテメエも女抱えてたらその様かよ！」

「ほほほ、十守峻稀よ、その女は将来妻の召使いにする予定じゃ。返し

てもらおうかの」

さらにその後ろから世界最高クラスの魔女、パトラまでやってきた。……状況は最悪。俺の錆び刀が変化へんげさえすれば突破口はあるだろうが、どうやったらそうなるのかは不明。守り刀だと言われて貰った方がいいがボロっつい見た目のわりには鞘共々やけに丈夫なだけで肝心な時に役に立たない。この鉄碎牙に眠る力を使えばコイツらをまとめてぶっ飛ばせるのだろうか。

「ご主人……」

背後のリサが心配そうに俺の衣の裾をキュツと握る。

「……大丈夫だ。コイツらの元になんて返さない。お前は俺が守るから。絶対に」

リサへそう返したのが聞こえたのかブラドがまた高笑いする。

「ハハハハハ！この状況でどうするって言うんだよ！リサはともかくプロフェッショナル教授からも、お前だけなら殺してもいいって言われてるからなあ。串刺しにしてやるぜ。ああ、その前にリサからも血を貰わなくちゃなあ。テメエの目の前でじっくり血を貰って、お前はそれからぶっ殺してやるか」

そう言ってブラドはその手に持った長さが2メートルはありそうな鉄筋をかざしながら近付いてくる。いくらなんでもあんなものを振り抜かれたらマズイな。

「うるせーな。リサはもうお前らの元になんか返さない。俺はコイツの主人で、勇者だから、守るって、そう決めたんだよお!!」

絶体絶命とも言える危機の最中ではあったが、いやむしろ、だからこそ俺は心からそう叫ぶ。すると

ドクン！ドクン！

右手に握り締めた錆び刀である鉄砕牙が脈打つのが感じられた。そして、それはまだ続く。

ドクン！ドクン！

俺はただ感じるままに鞘を腰に差し、鉄砕牙を上には振り上げたその時、鉄砕牙が輝き、その後には鉄砕牙の刀身が前の錆び刀ではなく、俺の身の丈程はあろうかという、巨大な牙のように変わっていた。

「……………コイツには、指一本触れさせねえ！」

両腕で鉄砕牙を振り抜く。虚空を切り裂いた鉄砕牙から風と共に無数の衝撃波が狼やブラド達に襲いかかる。

地面は魔物でも暴れたかのようにであり、巨大な爪痕のように抉れ、その場にいた狼たちは、そのほとんどが無惨にも散り、ブラドも下半身と上半身の左側が肉片となって吹き飛んでいた。

さらに奥にいたパトラは砂を操り、どうにか壁を作ったらしいが、それでも腕から軽く血を流していた。

これが鉄砕牙の真の威力なのだろうか？……………いや、今は逃げることに先だ！

また矢が飛んできては適わないので鉄砕牙は抜き身のまま、俺はリサを脇に抱えてさっさと壁を飛び越えた。そのまま跳ぶようにして走り、とにかく南下する。

今はとにかく距離を稼ぐことが重要だ。どうせブラドはあの程度では死なない。だからこそアイツが復活する前になるべく逃げる必要がある。狼たちはあの鉄砕牙の一撃以前にも何匹も自分の爪で引き裂いてきた。だから多分こちら辺にはいないだろうし、パトラも自分の傷を癒してから来るだろう。しばらく街中を駆け抜け、矢を射て

いた奴からもいい加減射程範囲外に逃げただろうと判断し、俺はリサを背中におんぶする。

「ご主人様、さっきのは……？」

リサが背中越しに聞いてくる。流石に驚いたのだろう。俺だってビックリしたのだから。

「分からんが、多分、今の鉄砕牙が本来の姿なんだと思う。さっきのも鉄砕牙の、言い伝えられていた一振りで100の妖怪をなぎ倒すっていう力なんじゃないかな」

そしてそれがあのタイミングで発現したのも、俺があの時リサを守ると声に出したからこそなのかもな。それに鉄砕牙が呼応し、変化したのだろう。……守り刀とはよく言ったものだ。これはリサを、守りたい人を守るための刀だということだ。

「……チツ！」

遂に森の中まで来て、このまま逃げ切れるかと思っただが、そうは問屋が下ろさなかつたようだ。

今日の前にいるのはさっきブラドが言っていた教授その人だった。

俺はリサを降ろし、後ろに下がらせた。

「リサ、コイツは俺がどうにかするから、お前は先に行け。後で絶対に追いつくから」

元々化け犬の大妖怪の血が流れている俺は鼻が利く。さらに今は半分妖怪に変化へんげしていて、その先祖——俺の2つ名でもある犬夜叉という半妖——と同じくらいの身体能力や妖力を発揮できる。いくら

裏世界の秘密結社であるイ・ウーを腕っ節でまとめ上げる教授が相手でもどうにかなる自信があった。まして今はリサがいる。絶対に負けられない。

「……分かりました。絶対に、来てください」

「ああ」

俺が短く返すと教授を避けるように大回りして、リサは走っていった。俺は教授がリサを後ろから捕まえないか警戒していたが意外にもそんなことはしなかった。

「……意外だな。てつきり追いかけると思ってたけど」

その時はもちろん鉄砕牙を振り抜く気でいたのだが。

「君を倒してからでも間に合うさ。そう推理したまだけだよ」

「そうかよ。でも、俺は負けない」

「ふふっ、そうかもしれないね。でもその刀は人を殺せない。そう推理してみるけど、どうかね？」

「うるせーよ、人外。試してみるか？」

強がってみたものの、確かにそれは懸念材料であった。さつきはそもそも人間が少なかったし、パトラも死ぬような距離じゃあなかったからあの衝撃波——言い伝えられていた『風の傷』という技だと思う——が出たのだろうかこの状況で使えば確実にコイツは死ぬだろう。あくまで人を守るための刀である鉄砕牙に果たしてそれができるのかどうか……。

「……くそ」

鉄碎牙を軽く払い、変化^{へんげ}を解く。

それを見た教授は目を細める。やっぱりかと、その顔は語っていた。

「アンタは爪で充分だ」

「そうか」

短く返した教授の周りからいきなり俺の足目掛けて高压水流が飛び出してきた。

突然のことに回避が間に合わず左の大腿部に掠める。

「……チツ！」

そこで俺は爪で奴の足を狙う。

それは後ろに跳ぶことで躲され、ただ大きく土の地面を抉るだけに終わる。

すると教授は杖を地面に叩きつけてその中に仕込んでいたスクラマサクスを取り出し、それで連続で斬りかかってくる。さすがに避けきれずに一撃胸にもらう。

ビシユツ！と裂かれた胸から出血するが、俺はその血を爪に染み込ませる。そしてそこに自分の妖力を込めて爪を振るう。

すると妖力で硬化した血が刃となった教授に襲いかかる。——飛刃血爪という技だ——今まで見たことのない技だったらしく軽く眉を寄せるがそれでもその程度で全てスクラマサクスで弾かれる。

俺はもう片方の爪にも血を染み込ませてもう一度、今度は両手で飛刃血爪を放つ。そして教授がそれをスクラマサクスで弾く隙に腕ごと引き裂くつもりで右手の爪を振るう。

「……ッ！」

それでも教授には軽く右腕に掠める程度まで躲されてしまう。それでも俺は今度は左手を使い近距離で飛刃血爪を飛ばす。しかし硬化した血の刃を教授はまた更にバツクジャンプで避ける。その間に俺は鉄碎牙を抜き放つ。牙のように変化^{へんげ}した鉄碎牙は風のようになものをまとっていた。そして右腕1本で鉄碎牙を少し先の地面に向かって振り抜く。虚空を切り裂いた鉄碎牙はしかし先程のように無数の衝撃波を撒き散らすことなく幾つかの傷を地面に付けるだけだったが、その衝撃波の光と舞い上がった土煙に紛れた俺はリサを追いかけることにした。

これ以上コイツには構ってられない。

木々の間をすり抜け、飛び退って行く俺の背中に高圧水流や電撃が迫る。いくつかは掠めたり食らったりするが、もう一度、片腕で振るったために威力の落ちた風の傷を叩きつけることでもうそれ以上の追撃はなくなった。

……しかし、アイツは本当に俺を倒す気があったのだろうか？教授の推理は卓越し過ぎて条理^{コグニクス}予知とまで呼ばれるほどなのに、それがあの程度で終わるのだろうか？

どうにもいなされただけののような気がしてならなかった。どこか、様子を見ているようでもあって、それが気持ち悪かった。



少しリサの匂いを辿りながら走り回っていると向こうに見慣れた金髪が見えた。

ようやくリサに追いついたようだった。

「リサ！」

「ご主人様！」

俺の呼びかけにリサも振り向いて答える。

「大丈夫だったか？」

「リサは大丈夫です。でも、ご主人様が……」

俺の胸の傷を見てリサの顔が歪む。

「これくらいなら今は大丈夫だ。とにかく追いつかれる前に逃げるぞ。背中に乗れ」

「は、はい」

まあ背中も血まみれなのは変わらないが走って逃げるのならお姫様だつこよりもおぶつた方が楽だ。

リサを背中に乗せてまた走る。今はとにかく逃げて距離と時間を稼ぐことが先決だ。それに、千葉県との県境に親父の知り合いの爺さんが車で待っている。そこまで行ければ一息つけるだろうし。



「はあ、はあ、はあ、悪いなりサ」

あと少しで待ち合わせの場所だという所まで来たが、夜中とはいえ、他の人間が車や何かで通りかからないということもないし、半妖に化した姿を人目に晒したくはないので今はリサに肩を貸してもらいながら歩いている。

俺は曾祖父が半分妖怪の半妖でその後時代の変化とともに妖怪の数が激減、その影響でだいぶ俺の中の妖怪の血は薄まっているのだから、どうやら俺は先祖返りとかでかなりその血に宿る妖力は強いのだそうだ。おかげで曾祖父の姿にかなり近い見た目に変化へんげできるしその間は彼と同じくらいの力を発揮できるらしい。……らしい、と言うのはそもそも曾祖父はかなり前に他界しており親父も祖父から話を聞いたことがあるだけだからだ。しかし曾祖父の形見である火鼠の衣と妖刀鉄碎牙は俺まで受け継がれてきている。そして皮肉なことに、俺がイ・ウーでの活動を通して『犬夜叉』という2つ名で呼ばれているが、その曾祖父の名前もまた『犬夜叉』だったららしい。

しばらく歩くとようやく待ち合わせの場所まで辿り着いた。そこには1台の車とその中に一人のお爺さんがいた。向こうも俺たちに気付いて車から降りてきた。

「遠山さん、ですか？」

「お前が十守の息子か？」

「はい、こっちはリサです。すいません、いきなり巻き込んでしまつて」

「気にするでない。早く乗れ」

そう言われて俺たちは後部座席に座った。……やつと、安心できた。

——そこで俺は意識を失った——

レインボーブリッジの死闘！金剛石の鉄砕牙

「で、その後はその人の家で療養してから司法取引によって埼玉県の武偵中学に編入して、そして今に至るわけだ」

戦闘とかの細かいところまでは一々言わなかったが、2年前にイ・ウーが日本に来て暴れる隙に二人して逃げ出したということのアリアには教えた。

「ふうん、それで後々突っ突かれたくないところもあるから敢えて司法取引で編入することで過去をまとめて清算したのね」

「ああ、話が早くて助かる」

「と言うことはあんた達、武偵殺しについても知ってるのよね？」

まあ、当然そこは聞かれると思っていた。俺たちがイ・ウーに所属していたということはアリアが追いかけている人物たちのほとんどを知っているはずだということになるからな。

「ああ、知ってる。けどその前に、だ。俺たちは今はイ・ウーから狙われていてもおかしくはない。と言うより確実に狙われているだろうな。だからイ・ウーと真っ向から戦うって言うお前とは組めない。けれど、確かにこの学校だとお前と合わせられそうなのはキンジだけだろうな。だからもう一度訊くぞ。本当にキンジがいいんだな？キンジでいいや、程度なら俺はお前がキンジをパートナーにしようとするのは止めるからな」

これだけは譲れないのだ。俺がイ・ウーと戦うのはあくまでも向こうから来た時だけだ。俺から向かう気にはなれない。それはリサを余計な危険に晒すことになるからだ。

「……そうね。少し、時間をくれないかしら？」

少し悩んだ後、アリアはそう言った。

「時間？」

「そう、アンタがそこまで言うんだし、あたしももつと真剣に考えなくちやいけないかなって思ったの。だから、見極める時間を頂戴」

「あ、ああ。そうだな。まあ、そこら辺はキンジ本人と話し合ってくれ。まあ、仕方ないから今日は泊まっていけ。もう夜だしな」

「……そうね。そうさせてもらおうわ」

……ピン、ポーン……

と、俺たちがそこまで話し合ったところで慎ましやかなチャイムが鳴った。この鳴らし方は多分白雪だろうから俺はキンジに出てもらうことにした。

少しすると、コンコン、とキンジがリビングのドアをノックしたのが聞こえた。

「ああ、入っていいぞ」

俺がそう言うのとキンジが大きめの弁当箱を抱えて入ってきた。やっぱり白雪だったようだ。今度は夕飯を持ってきたのか。

「話はまとまったのか？」

「んー、とりあえずアリアは今日泊まるみたいだぞ」

「……………は!?!」

「いや、そんなに驚かれてもな。もう遅いし、1日くらいはいいだろう」

「……………分かったよ」

キンジも渋々ではあるが了解してくれた。

「でも、俺は強襲科には戻らないからな」

「それはともかく、……………とりあえず風呂だな。いつもはリサが最後なんだけど、今日はどうする?」

この瞬間、俺とキンジはアリアによって外に追い出されるのだがそれはまた別のお話である。



……………何かおかしい。俺とリサは今日雨が降っているから早めに寮を出たはずだ。なのになんでもうバスが来ているんだ?……………しかもギリギリ授業に間に合うバスの1つ前のが。

俺は2つ前のに乗ろうと思っていたのに。

仕方なしに携帯で時間を確認すると、思っていた時間よりもさらに何分か経っていた。俺は普段から腕時計とかは着けないので部屋の時計か携帯に内蔵されている時計で時間を確認するのだがどうやらいつの間にか部屋の時計の時間が狂っていたようだ。

まあ、どのみち授業には間に合うし、特に問題は無いので俺たちは

そのバスに乗り込む。

しばらくするとマナーモードにしていた俺の携帯がブルブルと震え出す。着信があったようだ。

携帯を取り出すとメールではなく電話の模様。着信はアリアからだった。バスの中なのでそれだけ伝えて後でかけ直そうと思い周りの奴に軽く頭を下げてから出る。

「峻稀！今どこにいるの!？」

するといきなりアリアのキンキンのアニメ声が大音量で耳に響いた。

「……7時50分のバスだ。バスの中だから切るぞ。後でかけなおし」

「待ちなさい！事件よ！」

電話を切ろうとしたらいきなりそんなことを言われた。……事件だと？

「……何があった？」

「その次のバスがジャックされたわ。7時58分のやつよ。本当はアンタにも来てほしかったけど無理そうね」

「……いや、どうにかして行く。お前はお前でどうにかしろ」

「は？行っちゃったってどうするんの——」

リサにカバンを預け、途中で電話を切りバスの運転手に告げる。

「運転手さん、これの次のバスがジャックされた。一旦止めてくれ。俺はここで降りる」



雨の中、元来た道を引き返しながらバスが去るのを確認して俺は体に眠る妖怪の血を目覚めさせる。すぐに体中に力が漲るのが分かり、確認はしていないが髪は銀色に染まり耳も人間のそれではなく犬のようになっていいるだろう。目の色も黒から金に変わっているはずだ。

そして俺はそこから跳ぶようにして走り出す。レインボーブリッジを抜けトンネルも抜ける。遂に市街地に入った。そこで俺は標識や看板、電柱、建物の外壁などを足掛かりにしてひたすら戻る。

少しすると雨音に混じってヘリのプロペラの轟音が聞こえてきた。……そろそろだな。

するとようやくジャックされたであろうバスが高速でこちらに走ってくるのが見えた。今度はバスの進行方向に一緒に走り、なるべく相対速度を合わせて飛び乗った。縁を掴み滑り落ちるのを堪える。ベルトのワイヤーを打ち込み振り落とされないようにしてから変化^{へんげ}を解く。少しするとようやくバスに追いついたらしく、真上からヘリの音が聞こえ、上を見るとアリアとキンジが強襲用パラシュートを使って屋根に転がり落ちてきた。キンジが落ちそうになるがアリアが腕を掴んで引き留める。

「な、なんでアンタがあたし達より早くここにいるのよ!？」

流石に本当のことを言うのは後々面倒になるので適当に誤魔化さ

ないとな。

「……企業秘密だ。それより俺にも状況説明を。今回のパーティーはこの3人だけか？」

「へりにはレキも待機してる。……ねえ、アンタ本当に——」

武偵殺しの犯人を教えてくださいませんか？と、その顔は語っていた。

悪いな、それを今教えろと俺やリサが復讐にあうから、教えられないんだよ。それに、アイツとは一応友達だしな。

だから俺は首を横に振る。アリアは残念そうな顔をするが教えられないものは教えられないのだ。

「……そうだな、キンジは車内へ。アリアは外回りから爆弾を探せ。俺はアツチを片付ける」

俺の目線の先には無人のオープンカーが1台。しかし座席にはウージーと思わしき短機関銃サブマシンガンが固定されていた。

アイツ、俺がいてもお構いなしということか。

俺は懐から2丁のH&K USPを取り出す。コイツは高火力な45ACP弾を12発も撃てる拳銃だ。

俺もキンジもあのモードではないのだが、とにかくやるしかない。

二丁拳銃で弾丸をばらまき、どうにかウージーを破壊することに成功した。

その間に車内に入ったキンジによれば女子生徒の携帯からスピードを落とすと爆発する爆弾を仕掛けたと武偵殺しに言われたそうだ。

しかし今さっき通り過ぎた路地交差点からまたウージーを積んだオープンカーが今度は3台も出てきた。

「クソ……いくらなんでも多過ぎるだろ！」

悪態をつくが状況が良くなるわけではない。とにかくこいつらを

ぶっ壊していくしかないのだ。

しかし俺が1台に手こずっていると、もう1台がバスの車体の下にあった爆弾をアリアが解体を試みているところに追突してきやがった。

ドン！という衝撃によって俺も銃撃を止めざるを得ない。

その隙にもう1台が側面に回り込み無数の銃弾を車内にばらまく。バリバリバリバリッ!!と窓ガラスを粉々にして内部にも銃弾が降り注いだ。

俺はどうかそこままで2丁のウージーとそれが乗っている車を破壊するが、そこで予備マガジンも含めて弾丸が切れてしまった。まだ、ウージー付きの車は1台残っている。

するとトンネルを出たあたりでヘルメットの無いキンジとアリアがバスの上まで這い上がってきた。

「おい！まだ敵は1台残ってるぞ！」

しかし相手側がその隙を逃すはずもなく、照準をこちらに合わせてきた。そしてそのまま引き金が引かれる……っ！

「チイッ！」

俺がウージーに向かって弾切れの拳銃を投げつけ、アリアがキンジを庇った。

バシッ！という音と鮮血が飛び散る。そしてアリアがとつさに放ったらしい弾丸でウージーは破壊されたが刺し違えたかのようにアリアの額からも血が出ていた。

「アリア！」

キンジが叫ぶ。

「アリアー・アリアー・アリアあ！」

キンジの絶叫が響くがまだ終わっていない。

なんと今度は長大なライフル——それも50口径の対物ライフルだ——と、これまたウージーを積んだ車がそれぞれ1台ずつこちらに猛スピードで向かってきた。

……マズイ！もうこっちはキンジしか拳銃を持っていない上に相手は対物ライフルだ。撃ち合いになったら勝ち目なんてないぞ。それに、最悪なことに向こうは拳銃の弾が届かない範囲から、直撃すれば人間なんて真つ二つにできる凶弾を放つ気だ。

やるしか、ないっ！

確実に沢山の人間に見られるが背に腹は変えられない。

俺は本日2度目の変化へんげをすることにした。内側から沸き上がる力、さつきよりも鋭敏になる嗅覚。耳は頭の横ではなく上に生え、目と髪の色も急激に変化する。

この学校ではリサや極一部の教員しか知らない、俺の秘密。知られたら騒ぎになるのは必然。

それでもこれを使わなければ誰も守れない。

だから、使う。

「……はっ!?どうしたんだ、お前——」

キンジが呆然と聞いてくる。まあ、初めて見たのなら仕方ないかもな。でも今はそれどころじゃない。

「俺のことはいい！お前はウージーをなんとかしろ！」

そう叫んだ俺は鉄砕牙を抜き放つ。そしてまた鉄砕牙も変化へんげし、そ

の姿を錆び刀から巨大な牙のような刀身へと変貌する。

さらにドクン！と1つ脈打つとその刀身が全て硬質な^{ダイヤモンド}金剛石で覆われる。

それを俺はキンジたちの盾になるように構える。

すると、バゴンンンツツツ!!と馬鹿げた衝撃が鉄砕牙に叩きつけられる。下からの衝撃によって俺の体が宙に浮く。手放しこそしなかったものの、鉄砕牙を弾かれた上に、そのあまりの威力に打ち込んだワイヤーも切れた。

そのままバスから放り出されるがそれでも俺は空中である程度体勢を整えると、対物ライフルを積んだ車に向かって右手で硬質なダイヤモンドに覆われた鉄砕牙を振り抜き、その軌道から無数のダイヤモンドの槍が飛び出す。

金剛槍破と呼ばれるその技は巨大な金剛石の槍を無数に放つ技。ぶっちゃけ飛ばした金剛石は後で回収しないと不味そうなので使いたくはないのだがこの際贅沢は言っていられない。

鉄砕牙から放たれた金剛石の槍は対物ライフルを車ごとどころかレインボーブリッジまで突き刺し完全に停止させた。

「……グッ……痛ってえ！」

俺はそのまま背中からコンクリートに打ち付けられゴロゴロと転がってしばらくしてから止まることができた。立ち上がって顔をあげる。するとちょうどバスが俺の横を猛スピードで通り過ぎていった。

「あっ……」

しかしウージーを積んだオープンカーが俺のところに突っ込んでこようとしていた。死にはしないだろうがこれは喰らったらかなりマズいな。金剛石の鎧の無くなった鉄砕牙を構えて一か八か叩き斬ろうとしたその時、

ガクンツ！と車が傾き、タアン！タアン！という発砲音が一瞬遅れて響く。空中に飛び上がり、減速したオープンカーの後部座席に取り付けられたウーザーを車体ごと鉄砕牙で叩き斬る。

そして車体が爆発し、その衝撃で後ろに吹っ飛ばされるが今度は空中で回転し、バランスを整えてからしつかりと着地した。

するとまた、今度はバスの走っていた前方からタアン！タアン！という音が聞こえ、ドウウウウツ！と海中から爆音と共にでっかい水柱があがった。どうやらさっきのオープンカーとバスに取り付けられた爆弾への狙撃はレキがやったようだ。しかしアイツ、不安定なヘリの中からバスの車体の下にある小さい爆弾を狙撃で破壊したのか。あいつも大概化物だな。

事件は一応の解決を迎えたがまだ問題は残っている。

「……………これからどうしよう」

こっからだど武偵高までは距離があるし、なにより大勢の前で鉄砕牙の大技を放ったり変化へんげしたり。……………放った金剛石の槍の回収の目処は立っているのだが、それ以外の問題は山積みだった……………。

休息と亀裂

金剛石の槍をこつそり処分してから、雨に打たれながらテコテコと歩いていると30分程かかってようやく武偵高までたどり着いた。……誰も迎えには来てくれませんでしたよ、ええ。そりやありサは車の運転は出来ないしそこは仕方ないとは思いますが……。でも高速で走るバスから叩き落とされたんだから誰かに救急車くらい呼ばれても不思議じゃないと思うんだけどなあ。

そして、たどり着いた直後に始まったのは目撃者からの質問攻めよりもむしろSSR超能力操作研究科からの勧誘だった。強襲科では将来、仕事上で敵としてカチ合う可能性もあるので自分の技術などを秘匿することは間々あることなので今回もそういう風習の上で聞いてこなかったのかもしれない。少し——いや、かなり心配だったのでそこは安心した。

いや、まあでもSSRには行きませんがね。訓練とかの時に本気で技を使って鉄砕牙振り抜いたら校舎ぶつ壊れちゃうし。

今日は午前中の授業を全部休み、事件の後処理や軽い報告などを終え、放課後になってソイツSSRらを振り切り、リサと合流する。しかしリサは俺がバスから突然飛び出したのが気に入らなかつたのか拗ねたようにそっぽを向いてしまった。

「…………いきなり飛び出して行って悪かったよ」

まあ、これは俺にも非があったかなと思ひ謝罪する。それに対してリサはそれでもそっぽを向いたままだったのだが

「……………」

何も言わずに左手だけ差し出してきた。そしてチラツと俺の方を見たが、また違う方を向く。今度は少し照れたような表情ではあつたが。……なんだかいつにも増して可愛いな。

俺も一つ息をつくとりサの手を握り歩き出す。

手を繋いだまま黙っているリサと一緒に寮の自室に戻りリビングまで行くと、こちらを向いて俯いたりサが突然抱きついてきた。リサの柔らかく甘い香りが鼻孔をくすぐり、悩ましい感触が押し付けられる。

ドクン！と1つ心臓が大きく脈打つ。僅かではあるが、体の真芯に熱く滾る血流が集まる感覚。

「り、リサ？」

「心配しました！いきなり行ってしまわれるし、他の人に聞いたら対物ライフルまで出てきたって言われて！中々戻ってこないですし！帰ってきたら怪我もして！本当に、本当に……っ」

最後の方は涙で声がかすれて嗚咽も漏れている。どうやら俺が思っていた以上に心配をかけてしまっていたようだ。多分、こここのころは平和が続いていたから余計だろう。

「ゴメンな。心配かけちゃったな。でも俺、リサが待つてくれるなら絶対に戻ってくるから。何があってもお前を守るって言ったら俺は死なない。絶対だ」

俺もリサを抱きしめ、その美しくサラサラした金髪を撫でる。そうだが、俺は帰ってくるんだ。誰にだって負けない、コイツを傷つけようとする奴は全て倒す。たった1つの、何よりも、誰よりも愛おしいリサの為に。



「そう言えば、使われてしまったのですね」

キンジも帰ってきたので俺の部屋に行き、ちよくちよくある甘えモードに入ったりリサにしばらく膝枕をしてあげながら頭を撫でたりして愛でていると上体を起こしてから、そんなことを聞いてきた。……ちよつと顔が近かったので恥ずかしくて目線を逸らしてしまう。

「ああ、でもあそこじゃあ使うしかなかったんだ」

「リサは心配です。ご主人様がまた危険な目にあってしまうのが。それが怖いです。守ってほしいと言ったのはリサなのに、変ですよね？でもリサはご主人様に傷付けてもらいたくないのです」

キュツと俺にしがみつきなごらリサは呟いた。それに対する俺の答えなんて決まっている。

「俺はむしろその程度でお前を守るんならドンと来いって感じだけだな。それに言ったろ？俺は絶対にお前のところに戻る。お前が待っていてくれるから俺はどんなに危ない橋だって渡れるんだ。だから、信じて待っていてくれ」

そこだけは力強く、リサの目を見て言うと、リサは伏し目がちにボソツと何かを呟いた。

「ご主人様は、ズルイです……」

「ん？」

最後がよく聞こえなかったので聞き直すとリサが突然俺の首に腕を回しながら

——チュツ——

と、唇に1つキスをしてきた。そしてふっ……と立ち上がりこちらを振り向いた。

「もう夕飯の支度をしなくてはいけませんね。今日のノートは机の上に置いてあるので使ってください」

につこり笑っているその頬には薄らうすと朱が差していた……。そしてパタリとドアを開けて俺の部屋を出ていくリサ。

「……え？あ、ああ」

俺はそれを生返事をしながらポケットと見送ることしかできずにいた。

突然のことに頭が追いついていかなかったが時間が経つにつれて顔が赤くなってきた。そしてじわりとまた体の真芯まごに集まる血流。久々ということもあってか随分とゆっくりだったな、今回。

頭は無駄に冴えてしまったが正直特に推理することも見つからなかったので大人しくリサに借りたノートで今日の復習と明日の予習でもやっついようかな。



それは Hysteria Savant Syndrome とも呼ばれる、一種の先天的遺伝形質である。この特性を持つ人間は、ある一定以上の恋愛時脳内物質βエンドルフィンが分泌されることにより、それが常人の約30倍もの神経伝達物質を媒介し、大脳・小脳・脊髄といった中枢神経系の活動を劇的に亢進させるとかなんとか。

その結果として、HSSの効果が出ている間は論理的思考力、判断力、反射神経などが飛躍的に向上するらしいのだ。

長くなつたが要するに、この特性を持つ人間が性的に興奮すると一時的に人が変わったように強くなれるのだ。

しかしこれはただ強くなるだけではない。

聞いたところによると、この形質は元々は子孫を残そうとする本能が異常に発達したものらしい。

おかげで HSS — キンジがヒステリアモードと呼んでいたので俺もそれを使わせてもらっている——になると、まず何がなんでも女を守ろうとしてしまう。そしてもう一つ、——これはきつと体験した者だけが分かる恥ずかしさであろうが——女の子に対して非常にキザな態度をとってしまうのだ。それはもう優しくするのは甘い言葉を囁くは、果てにはさり気なく触ったりと、新宿のナンバーワンホストかと思うほどである。正直これさえなければなあ……、と思わずにはいられない。

で、こんなぶつ飛んだ遺伝子を遺伝させているのはもはや現代では遠山家だけらしい。もちろんキンジも持っている。……そして俺もイ・ウーにいる時に、「これはリサを守るのに丁度良い！」と思い手に入れた。

イ・ウーでは技術の教え合いというのがあり、それは遂に遺伝子レベルの特殊技能すら写せるレベルに到達したその技術でヒステリアモードを入手し、そしてその直後に俺はイ・ウーを脱走した。

で、これのおかげでキンジは武偵を志し、そしてこれのせいで武偵というものに絶望した。……まあ、絶望したのは半ば武偵という職業に希望を抱き過ぎていたからなのだが……。

また、キンジがいくら白雪にアタックされてもそれに気付かなかつたりなびかなかつたり、そして恋人同士なのにも関わらず俺とリサが互いにキスをすることすら中々無いのはつまり全部ヒステリアモードのせいなのである。キンジは必要以上にヒステリアモードになりたくないために女性の心理について知ろうとせず、俺は子孫を残そうとする本能に流されないように。——この歳で子持ちとか洒落にならないし何よりそれはお互いに不幸になるだけだと思っただけだ。



次の日、俺とキンジは放課後にアリアの見舞いのために武偵病院まで来た。アリアはリアル貴族なのでなんと広い個室に入っているらしい。

そして俺たちがお見舞いの品として持ってきたもまんをバクバク食っているアリアにキンジが鞆からクリアファイルを取り出して彼女の膝元に置いていた。

「峰理子を中心に探偵科と鑑識科が調べてくれた調査結果だ。……けど、結局ヤツの痕跡は何も見つからなかった」

と、俺が言うとキンジも続く。

『武偵殺し』……か。俺のチャリジャックもバスジャックも、全部摸倣犯だと思ってたけどな。なんだって奴はもう逮捕されてるんだし」

「だから言ったでしょ。それは誤認逮捕なのよ」

まあ、そうなんだよな。そもそもアリアがここまで武偵殺しに執着している理由は武偵としてのプライドとか正義感からと言うよりも、むしろ誤認逮捕された人物を助け出すためというのが大きい。なんたって武偵殺しの代わりに捕まっているのは神崎かおりと言う女性でそして……

——アリアの母親なのだから——

そしてさらにアリアの母親には武偵殺し以外の嫌疑も大量にかけられている。そしてもう時間も無い。多分そろそろ高裁も負わって、最高裁を待っただけだろう。そして、正確な数字までは俺も知らないが、高裁までの量刑も事実上の終身刑と変わらないはずだ。

それもこれも全部イ・ウーのトップである教授が仕組んだ事なのだが……。

「……飲み物買ってくる」

「あ、ああ」

俺はそう言って席を外した。なんだか申し訳なくなっただからだ。アリアの額に怪我をさせたのも、そこまでの無理をさせたのも、なんだか全て俺のせいな気がして。

3人分の飲み物を買ってからもロビーで少しダラダラしてからア

リアの病室へ戻る途中に、キンジと鉢合わせした。なにやら陰鬱とした雰囲気だったのでさつき買ってきたキンジの分の飲み物を押しつけてアリアの病室に急ぐ。

病室のドアをノックするとこれまた随分と不機嫌そうに返事をされたが、とにかく中に入る。

「さつきすれ違ったが、キンジと何があった?」

「……アンタには悪いけど、あたしの探してた人はアイツじゃなかったみたい」

飲み物を放り渡しながら俺が聞いただと、そんな答えが返ってきた。

「……そうかよ。まあ、違うなら違うで仕方ない……とは正直思いたくないがな。まあ、どうしようもないのも確かか」

「……アイツに何があったのよ?」

少し間を置いて、アリアが聞いてきた。そうか、あの事件はアリアは察知していないだろうか。

「俺からは答えづらいな。まあ、1つ言えるのは、アイツはあれでも真剣に悩んで、苦しい思いをした。ということだけだ」

「……なら、キンジには酷いこと言っちゃったかな」

「あ?何言っただよ?」

「どうせアンタが武偵をやめる事情なんて、大したことじゃないって、

言ったのよ」

それを聞いて俺は危うくコイツを殴り飛ばしそうになった。俺はキンジが苦しんでいるのを間近で見えてきたからだ。それを何も知らないコイツが大したことじゃないと言いつ切るのはどうしても納得いかなかった。あの時は真実を伝えられなかったのだけど。まあ、全てを聞いたとしても、それでもアイツは武偵に絶望したままである可能性の方が高いとは思うのだからな。

所詮武偵は金で動く『なんでも屋』だと、割り切つて、その中でも戦う理由を見つけていかないと、武偵なんてやっていられないのだ。

「……その怪我に免じて、ぶん殴るのは勘弁してやる。それと免じるついでにもう一つ教えてやる。武偵殺しの目標はアリア、お前だ。タゲット
乗り物には気をつけろよ。じゃあな」

なんとなくこの場から逃げ出したくなった俺は武偵殺しのヒントを置いて早足に病室を後にした。なんか後ろでアニメ声が騒がしかったが無視だ無視。

結局俺のこのヒントは生かされることは無かったのだが、それについて俺が知るのもう少し後になってからだった。

銀色の毒使い現る

週明けの夕方、寮でゆっくりしているとキンジからいきなり電話がかかってきた。それを取ると随分と焦っているような声だった。

「峻稀！今すぐ羽田空港まで来てくれ！」

「は!?!羽田?お前、今どこでなにやって——」

「事情は後で説明する!とにかく急いでくれ、時間が無い!今夜7時のチャーター便だ!」

そう言うときんじは電話を切ってしまった。ちくしょう、これじゃあ行くしかないじゃねえかよ。声の質的にも結構大きな問題みたいだし。

「悪いリサ、飯先に食っててくれ!」

リサにそう叫ぶと一応の武装確認もそこそこに玄関から飛び出した。とにかく急げとのことだったので、周りに人がいないことを確認するとすぐさま変化へんげして寮の屋上まで跳躍。そこから羽田まで飛び跳ねることにした。

空港の直前で変化へんげを解き、キンジからのメールで送られてきた通りに羽田空港の第2ターミナルからチェックインは武偵手帳についた徽章で通り抜け、金属探知機なんてもちろんスルーしてゲートに飛び込む。

するとちょうどハッチを閉じつつあるANA600便・ボーイング737-350、ロンドン・ヒースロー空港行きに飛び込んだキンジに追いついた。

無理矢理一緒に機内に駆け込むとボタン、とハッチが閉ざされる。
……ギリギリだったな。

「武偵だ！離陸を中止しろ！」

目を丸くして驚いている小柄なキャビンアテンダントにキンジが
武偵手帳を突きつけて言う。

「お、お客様?!失礼ですがどういう——」

……俺も聞きたいよ。多分ではあるが、イギリス行きの飛行機とい
うことでなんとなく想像はつくんだけどな。クソツ。なんでまた俺
が武偵殺しの事件ヤマに関わらなくちやいけないんだよ。

「説明してる暇はない！とにかくこの飛行機を止めるんだ！」

キンジの剣幕にビビりまくったキャビンアテンダントさんが2階
へと駆けていくと、キンジは疲れたのか、両膝をついてしまった。

「……なあおいキンジ、説明して——」

——くれよと言いかけた矢先に飛行機がグラリと揺れた。……動
いてるのか!?

「だ、駄目でしたあ……。規則で、こ、このフェーズでは管制官からの
命令でしか離陸を止めることはできないって、機長が……」

2階から降りてきたキャビンアテンダントさんがガタガタ震えな
がら俺とキンジを交互に見る。……ていうか、俺には助けを求めるよ
うな顔をしてくる。そんな顔してもどうにもできませんよ。

「ば、バカヤロウ……ッ」

「ひっ!?う、撃たないでください……。ていうかあなた、本当に武偵なんですか? 『止めろだなんて、どこからも連絡もらってないぞ!』つて、機長に怒られちゃいましたよお」

外を見るともう機体は滑走路に入り始めていた。ここで止めると他の飛行機と滑走路上で衝突する可能性もある。

俺はキンジとキャビンアテンダントさんを宥める。

機体が上空に出た辺りで2人とも落ち着いてきたのでキンジと壁際に寄って事情を聞くことにした。

「……で、キンジ。これは武偵殺しを追いかけてつてことなのか?」

小声で聞くと向こうも同じように合わせてきた。

「あ、ああ。多分ではあるがこの飛行機はいずれ武偵殺しにジャックされる。狙いはアリアだ。次はアイツ、殺されるだろうな」

どういう推理をしたかは知らないが、キンジは大体は正解にたどり着いたようだった。しかし、やはりこれは武偵殺し関連だったのか。それを聞いた俺は軽く舌打ちをしてから壁際を離れ、キャビンアテンダントさんに話しかける。

「……この機には神崎・H・アリアという客がいるはずだ。俺たちはそいつの友人なんでね。部屋まで案内してもらえませんか?」



このANA600便は普通の旅客機とは大幅に異なり、1階は広いバーに、2階の中央通路の左右に客室が広がる作りとなっている。……もちろん全て個室である。いわゆる座席というものが無く、全席個室で12部屋ある個室の全てにベッドやシャワー室を完備した超セレブ仕様。『空飛びリゾート』とか呼ばれていたのをニュースか何かで聞いたことがある。

「……き、キンジ!?——と、峻稀も?」

明らかに俺だけ後付け感満載の反応をされたがまあいい。とりあえずは合流できたようだな。

「……さすがはリアル貴族様だな。これのチケット、片道20万くらいするんだろ?」

そんなにすんのかよ……。さすがは『空飛びリゾート』だこと。

「——断りもなく部屋に押しかけてくるなんて失礼よ!」

「お前にだけは言われたくねえ」

ここは俺がきっちり言っておかないとな。新学期早々に俺たちの部屋に押しかけてきたのはコイツな訳だし。それを思い出したのか、アリアはうぐつと唸って黙る。

「……なんでついてきたのよ?」

「……この飛行機に武偵殺しが同乗している可能性が高い。……俺たちが来なかったらどうせお前は武偵殺しに勝てないからな」

「武偵殺しですって!?!?どういうことか説明しなさい!」

「……それはキンジに任せる」

俺はこの飛行機のどこに武偵殺しが潜んでいるのか考えなくちゃいけないからな。……とは言っても、アイツは変装も得意だったな。そうなると思えるだけ無駄かもしれないなあ。

「……いいわ、話しなさい」

アリアの許可を得たキンジが話します。武偵殺しの起こしたと思われる過去の事件とこの前の2件、そして執拗に武偵殺しを追っていたアリアが知らなかったシージャックと今回の（まだ起きてはいないが）ハイジャックのそれぞれの共通点についてを。

やっぱりシージャックでのターゲットは殺されたかと思っっているようだったがまだ訂正しない方がいいかもしれない。今回の事件が解決したらゆつくり話そうと思う。

キンジが推理を話し終わるとちやうど突然機内放送が流れ始めた。

「——お客様にお詫び申し上げます。当機は台風による乱気流を迂回するため、到着が30分ほど遅れることが予想されます——」

確かにちよつと揺れてるな。まあ、揺れ自体は大したことないのだけど。

しかし、ガガン！ガガン！と近くの雷雲から雷が聞こえてくる。さらに大きな雷の音が鳴り響くと……

「ひうっっ！」

と、アリアがベッドの中に入ってしまった。……コイツ、雷が苦手だったのか。

機長が下手なのかは知らないが随分と揺れが大きくなって雷雲も近くに感じられる。

しかもアリアはアリアで雷にビビってキンジに言外に助けを求めているし。それにキンジも応えるものだからわりと退屈だ。

まあ、どうせその内にハイジャックされるのだろうから今のうちに軽く銃の整備でもしておくか。

そう思った矢先

——パン！パアン！——

いきなり機内に銃声が鳴り響いた！俺の銃が暴発したわけでもアリアがキレて発砲したわけではない。機体の前方の方だ。

俺たちが部屋の外に出るとそこは12ある個室から出てきた客とキャビンアテンダントで老若男女が入り乱れて大混乱だった。

「キンジ！アリア！お前らは音の方へ行け！こっちは俺が収めるから！」

「わ、分かった！」

「任せたわ！」

キンジとアリアが銃声の方へ向かっていったので俺は武偵手帳をかざしながら騒ぎを収めようとする。

するとシュウウウウ！という音が聞こえて、ガスがこちらに流れてきた。

「キンジ！」

「早く部屋に戻れ！ドアを閉めろ！」

まだ廊下に残っていた数人を部屋に押し込み俺たちもアリアの部屋に戻る。すると、バチン！と機内の照明が消えたがすぐに赤い非常灯に切り替わった。

部屋に戻ると呼吸や手足の麻痺が無いか、目は見えるかなどを確認するが特に異常はない。どうやら無害なガスだったようだ。

するとそこにポンポンとベルト着用サインが注意音と共に訳の分からない点滅を始めた。

……これは、和文モールス？

アリアもそれに気付いたらしく、ボソツと呟いた。
それを聞いたキンジも解読を試みたようだ。

オイデ オイデ イ・ウー ハ テンゴク ダヨ

オイデ オイデ ワタシ ハ イツカイ ノ バー ニ イルヨ

「誘ってやがるな……」

「上等よ。風穴あけてやるわ」



1階のバーに降りると、はたしてそこにいたのはさっきのビビリのキャビンアテンダントさんだった。しかし服装が違う。彼女が着ていたのは武偵高の制服。それもヒラヒラのフリルだらけの甘ったるい改造制服だった。

「今回も綺麗に引つかかってくれやがりましたねえ」

そう言いながら、ベリベリと顔に被っていた薄いマスクのような特殊メイクを自分から剥ぎだした。

その中から出てきたのは、

「――理子!?!」

「Bon soir」

キンジが驚いている。仕方ないだろう。ついこの前までアホやっていた理子が実は自分たちを狙う爆弾魔で武偵殺しの正体だったのだから。

「よう、理子・峰・リュパン4世。この前はよくもまあ人のこと対物ライフルでぶち抜こうとしてくれたな。しかもご丁寧に学校まで休んで俺から逃げやがって。けどもう逃がさねえ。お礼参りだ、覚悟しろ」

懐から拳銃を抜きつつ俺は理子を睨む。

「くふふふ、やっぱリシュンちゃんも来ちゃうよねえ。でもいいの？学園島には理子のお友達が来てるんだよ？リサがどうなっても知らないよ?」

「理子……お前、向こうじゃ一応友達だったからお仕置き程度で済ませるかと思っただけ、分かってんのか？それは――」

「――でもシュンちゃんは理子に手が出せない」

そう言われて俺は黙ってしまう。そうだ、真偽はこの際関係無いのだ。リサが人質に取られたかもしれないだけで俺は動けなくなってしまう。それを理子は知っていて、的確に突いてくる。

「だからそつちで大人しく見ててね。下手な動きしたら、分かっているよね？」

そうやって理子は憎たらしくもウインクを飛ばしてきた。リサ程じゃあないが、そこそこ可愛いのがまたイラツとくる。

「……分かったよ」

俺も拳銃を仕舞い、バーのカウンターの奥の方の椅子に腰掛ける。

「……ねえアリア、おかしいと思わない？理子の名前は理子なのに、家の人間はみんな理子のことを『理子』って呼んでくれなかった。お母さまがつけてくれたこのかわいいうい名前を。呼び方がおかしいんだよ」

それを見届けた理子はアリアたちに向き直って話し始める。

「おかしい……？」

アリアが呟く。

「4世。4世。4世。4世さまあーって。どいつもこいつも使用人どもまで、理子をそう呼んだ。ひどいよねえ」

「それが、それがどうしたって言うのよ……、4世の何が悪いのよー」

そこは譲れないとばかりにアリアもはつきりとそう言う。しかしそれを聞いた理子は目玉をひんむいて叫ぶ。

「——悪いに決まってるだろ！あたしは数字か！あたしはただのDN Aかよ!?あたしは理子だ！数字じゃない！どいつもこいつもよお！」

ブチギレた理子は俺たちじやない他の奴に叫ぶ。かつて理子を『4世』と呼んできた奴らに向かって、怒っていた。

「だからあたしは勝つんだ！オルメス！お前を倒さないとあたしは一生『リュパンのひ孫』として扱われる。そんなのはゴメンだ！だからあたしはイ・ウーに入ってこの力を手に入れた！あたしはこの力でもぎ取るんだ!!——あたしを！」

真剣な面持ちで理子の慟哭を聞いているアリアとは対照的にキンジは何がなんだか分からないといった雰囲気だ。

「待て、待ってくれ、お前は何を言っているんだ？——オルメスってなんだ、イ・ウーって何だよ？武偵殺しは本当にお前の仕事だったのか？」

「……武偵殺し？ふん、あんなのプロローグを兼ねたお遊びだよ」

理子は今度はアリアをジロリと睨む。

「——本命はオルメス4世、お前だよアリア」

理子のその鋭い、獣のような眼にキンジとアリアは怯む。

「100年前の曾お爺様同士の戦いは引き分けだった。つまり今オルメスを倒せばあたしは曾お爺様を超えたことを証明できる！キンジ……、お前もちゃんと役割を果たせよ？」

「……や、役割？」

「代々アリアの家系にはパートナーが存在していた。ソイツには相方

の、お前から見たらアリアの力を引き出す役割が必要なんだよ」

見てるだけなのも暇なので会話に参加する。

「ついでに言えばオルメスってのは――」

「――そこまでだ」

理子に制止された俺は肩をすくめて黙る。

「そういう訳だ、とにかく曾お爺様と戦った初代のオルメスには優秀なパートナーがいたからな。条件を合わせるためにくつつけたんだよ」

「俺とアリアを、お前が……?」

「そっ」

クスリ、と学校でのアホな理子っぽく笑う。

「コレとシージャック以外の今までの武偵殺しの事件で分かりやすく電波を流してたのもそういうことだろ?」

やっぱり暇なので口を挟む。この程度なら別に喋っても構わないはずだ。

「そうそう。……でも一つ誤算があったとすれば、バスジャックまでやったのにキンジがアリアとくつつききらなかったのは計算外だったの。理子がやったお兄さんの話を出すまで動かないのは意外だった」

「そーいやいつの間にか時計がズレてたな。あれは結構リスキーだったんじゃないか？俺やリサが部屋の時計以外の方法で時間を確認したら危なかっただろ？」

「峻稀い、そんなに暇なら彼の相手してあげなよお」

「……彼？」

俺が眉を寄せると2階に続く階段から誰か知らないが男が1人降りてきた。

「――！」

その姿を見た俺は驚愕する。

白地に薄い紫の柄が入った着物に鉄の胸当て、腰まで届きそうな長い銀髪にその端整な顔をした額には細い三日月模様が刻まれ両頬にはそれぞれ2本の爪痕のような模様がある。

そしてなにより異質なのはその身に纏う雰囲気だ。明らかに人間のそれではない。俺には分かる。アレは絶対に人間じゃない。俺と同類の存在だ。

そしてソイツはキンジたちが向けた銃など気にする風でもなくスタスタと俺の方まで歩いてきた。

俺も立ち上がり変化^{へんげ}する。アリアが驚いた顔をしているが気にしてられない。

鋭敏になった嗅覚が捉える妖怪と人間の血が混ざった匂い。するとソイツはバキバキと指の関節を鳴らすとまだ俺まで2メートル近く距離があるのにも関わらずその鋭い爪を振るってきた。

「――っ！」

突然襲ってきたライトグリーンの鞭のようなものを左腕で受ける。しかしそれは俺の防弾制服を溶かしやがった。

ジュウツ!という音がして熱を帯びた左腕を見ると軽く火傷のようになっていた。……毒使いつてことか。

「……誰だお前」

俺の問いにフンと1つ鼻で笑うとソイツは口を開いた。

「貴様が『犬夜叉』というのなら私は『殺生丸』とでも名乗っておこう。これは私の祖父の名だ」

「なっ!?殺生丸……だと…?」

「くふふふ、アリアあ、こっちもそろそろ始めよっか」

それを聞いて我に返ったアリアと理子が戦闘を開始するのが見えしたがこっちはそれどころじゃない。コイツが本当に殺生丸の子孫だとしたら、本気で俺たちがやりあつたらこの飛行機が落ちちまう。

「安心しろ。飛行機は落とすなと言われてる。そうなる前に貴様を殺す」

「そうかよ……っ!」

「……リサ・アヴェ・デュ・アंक、か。貴様にはもったいない女だ」

「……は?」

唐突に出てきたリサの名前に気が抜ける。何を言っているんだ?コイツは。

しかしその隙を見逃さずに殺生丸は瞬間移動の如く高速で俺に接近、手刀で腹を突き刺そうとしてくる。

それを俺は後ろに下がりながら外側に弾く。なんだ今の動きは!?

「テメエ、リサをどうする気だ」

俺が睨みながら訊くと殺生丸はもう1度指を鳴らして答える。

「知れたこと。貴様を殺してリサ・アヴェ・デュ・アंकは私の女にする」